

(道徳)

**「児童の道徳性を育む教育活動の充実」
—教科・領域の学習を支える道徳教育—**

大阪市立菅北小学校 廣瀬由美 瀧瀬智史

1. 研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標「一人一人を生かす教育を推進する。」を設定し、知（自ら学ぶ子）、徳（助け合う子）、体（健康で明るくねばり強い子）をめざす子ども像として、日々の教育活動を展開している。

本校の児童の現状と課題を考えると、自尊感情が低いことや、願いや夢をもてないこと、すぐに暴言、暴力が出るなどの「心」の問題が浮かんできた。そこで、4年前から道徳の研究に取り組むことにした。最初の2年間は、道徳の基本的な学習過程と指導方法の工夫について研究を進め、教師の指導力の向上をめざした。研究3年目には、特に学校行事や児童会活動との関連を図り、実践的態度の育成をめざした。そして、本年度は研究主題を「児童の道徳性を育む教育活動の充実」とし、さらに「教科・領域を支える道徳教育」を副題として、本校の全教育活動において道徳的な視点をもって指導していくという研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

本校が5年前に実施した児童に対するアンケート結果から、本校児童の中に自尊感情が低く、願いや夢をもてない児童や、友人を肯定的に受け止めることができず、すぐに暴言や暴力が出てしまう児童がいることがわかった。また、指導の未熟さや計画性の不十分さなど、教師側にも問題があることがわかった。そこで、道徳の時間の指導を通して、自他の生命の尊重や自己肯定感などの自尊感情、他者への思いやり、善悪の正しい判断、社会生活を送る上での規範意識などの道徳性を養うとともに、主体的に判断し、適切に行動できる豊かな心をもった児童を育てたいと考え、学校の教育活動全体で児童の道徳性を育むことをねらいとした。また、望ましい集団の形成とその活動の充実を図ることにより、互いの違いを認め合い、信頼し合える人間関係を築くことができると考えた。道徳の時間においては、学級における話し合い活動を活発にし、「聞く力」「話す力」「話し合う力」などの言語活動を活用し、自主的・実践的な態度を育てられるような取り組みも進めている。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 児童の道徳性を養う環境づくり

- 道徳教育や道徳の時間の特質を理解するための研修を行い、教師の意識の向上を図る。
- 道徳教育の全体計画、学年における道徳教育全体計画別葉を作成し、全教職員が一致して道徳教育の展開を図る。
- 家庭や地域社会との連携を心がけ、学校の特色を生かした道徳教育の充実を図る。
- 児童会活動における異学年交流や各委員会の活動によって、自他を大切に思う児童の自尊感情を育て、よりよく生きようとする意識を高める。

視点② 道德教育の要となる道德の時間の位置づけの工夫

- 道德の時間の指導を充実させることはもちろんのこと、各教科・領域や外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動等との関連を図る。
- 事前事後の指導のタイミングや回数など、道德の時間の設け方を工夫し、効果的な指導ができるようにする。

視点③ 言語活動の活用

- 自己の振り返りで考えを整理させ、学び合う楽しさを味わわせる。
- 道德的価値にかかわる自分の感じ方や考え方を表現する場を工夫する。
- 話し合い活動を通して、一人一人の児童に自分の思いを表現させる。
- 書く活動を通して、児童にねらいとする道德的価値にかかわる自分の考えをもたせる。
- 自分と異なる考えや思いに接することができるように工夫する。
- 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 道德教育や道德の時間の特質を理解するための研修を通して、1時間の授業の進め方はもちろん、各教科・領域の学習を行う際にも、道德との関連を念頭において指導にあたる意識が高まった。
- 地域の方々との交流を図り、道德の時間に話をしていただいたり、体験活動のゲストティーチャーとして来ていただいたりすることで、児童は地域とのつながりをこれまで以上に感じるようになった。
- 様々な体験活動を道德の時間に学んだ道德的価値の確認や実践の場となるように位置づけることで、児童はその価値をより深く理解した。また、体験を通して得た考えによって自分の行為や内面を見つめ直すことができた。
- 学年の実態に応じて、書く活動や話し合い活動などを設定することで、道德的価値にかかわる自分の感じ方や考え方を表現することができた。

(2) 今後の課題

- 6年間を見通した道德性を養う授業をさらに進めていく。
- 小学校と中学校で児童生徒の課題を共有し、ともに道德性を養う取り組みを行っていく。
- その時や内容に応じて、道德の時間の位置づけをさらに吟味していく。
- ICT機器を活用した言語活動をさらに工夫していく。